



無念！！ 決勝進出ならず

今夏、8月23日～26日の4日間、埼玉県戸田オリンピックコースにて全日本学生選手権・全日本選手権及びオックスフォード盾レガッタが例年通り開催されました。我が同志社大学ボート部の力が全国でどこまで通用するのか。そんな想いを抱きながら戸田へと出発しました。台風による影響で、万全とはいえないコンディションの中でのレースでしたが、どのクルーも全力を出しきって戦いました。しかし、残念ながら、結果は関東と関西のレベルの違いを改めて痛感させられるものとなってしまいました。今大会での経験を、次回への発奮材料としたいと思います。

～インカレレース回想 Part 1～

対校 4番 米山 尚吾

〔予選〕

予選の日の前日、組合わせが発表され、その中に日本大学が入っていた。シーズン初めには、2000mを6分を切るタイムで走っているクルーである。誰もが焦りを隠せないまま夜になり、ミーティングを行った。予選から全力でぶつかるか、流して敗復に賭けるかだったが、予選を捨てようとする者はなく、当然全力をぶつける方向に固まった。予選当日、風速3mという暴風の中でのレースとなった。絶好のスタートを切った我々は500mを過ぎた時点で、トップは同志社、1秒差で日大となっていた。1500m地点まで一艇身差でついていければ勝てるというレース前の予想とは反対にリードしていたのである。誰もが勝利を確信した直後突風でバランスが崩れ、立て直しを計っている間に日大は視界から消え、その後の反撃も及ばず敗れた。終わってみれば日大と15秒もあっており、まだまだ力の差を感じるレースとなった。

〔敗者復活戦〕

対戦相手は、学習院を除き関西勢で占められていたのが精神的には楽であったが、油断は大敵である。特に

う後がないというのでどこも死に者狂いでくるにちがいない。蹴り出し前に気合いを入れ直しレースに向かったスタートで関大に先行され一艇身出られたが、コンスタントで軽く抜き去り、その後は独走となり1位で準決勝へ駒を進めた。

〔準決勝〕

相手は京大・慶応大、そして同志社であった。京大は関選の雪辱を晴らすべく必死でくるだろうし、慶応も今年が悪いとはいえず決して油断できない相手である。気はぬけなかった。スタートで京大・慶応大に出られたが、コンスタントに入るとすぐに慶応を抜き、京大との一騎打ちとなった。400・700・1000m地点での足蹴りも効かず、一艇身差のまま1300m地点にかかった。勝負の足蹴りを入れ艇速が伸びて1500m地点で京大と並んだのも東の間、京大がスパートをかけ半艇身離されてしまった。我々もスパートをかけ必死に反撃したが届かず、結局2位となり決勝進出はならなかった。来年は体力の充実を図り、最終目標である全日優勝へ向け一からやり直したい。



対校エイト (左からcox功力、宮崎、吉田拓、堀内、佐藤、米山、榊原、加藤、三上)

対校 Cox 功力 英俊

台風の影響による強い横風が吹きすさぶなか、第17回全日本学生選手権の予戦が行われた。12時発艇、1レーンから日本大学、宮崎大学、同志社大学、立教大学、日本医科大学、滋賀大学経済の6艇にて争われた。日本大学はこれまでの数々の大会において優勝しており、昨年のインカレ、全日本で唯一歯がたななかったクルーであり、予戦からいやなクルーとの対戦であった。

激しい波と風は昨年全日本決勝をほうふつとさせ、予定より20分以上遅れてのスタートとなった。スタート、スパートの改良によって以前のようにスタートで遅れることなく、逆に日本大学に半艇身あまりのリードをうばうことになった。しかし500mを過ぎた地点で突風があり、3レーンから4レーンに横流れに流されてしまった。たて直しはすぐにできたものの、同志社のような軽量クルーにとって、波と風の影響はあまりにも大きく、結局日本大学とは15秒差の2着におわった。練習量において他大学にひけをとるはずはないが、それ以上の絶対的な力の差というのを感じさせられたレースであった。

続いての敗復は順当に1位であり、翌日の準決勝に望みをつなげた。

明けて24日の準決勝、相手は2レーンから京都大学、同志社大学、慶応義塾大学の以上3艇である。予戦のレースからみて昨年の全日本優勝クルーである慶応義塾大学との終盤争いになるであろうと思われた。しかしふたを開けてみれば、500mでトップにたった京都大学が、同志社、慶応の必死のスパートをはねのけ一度もトップを譲らず、1位でゴールしていた。

何か悪い夢でも見ているかのような気分であった。泣き崩れる漕手を目の前にして、コックスとは何と無力で、役に立たないポジションなのだろうか、自分の無力さに腹が立ち泣くことさえできない自分が口惜しかった。

どんなに練習しても勝負は水もの、絶対的な力がないクルーはやはり勝つことができないのだ。

新体制2年目にしてゼロに戻ってのスタートとなったわけだが、一昨年のようなマイナスからのスタートではない以上、あせって駆けだすのではなく、着実な努力を積み重ねてさえいけば負け続けてきた今年の悔しさを、来年はきっと楽しいものに変えることができるはずだ。最後の年に準決勝で負けて「2年前は良かった」という思い出にふけることにはならないよう、同志社100周年に向けて日々の努力をつなげていきたい。



Jr.エイト (左からcox岡田、大竹、嶋本、谷 吉田武、勝本、井上、内田、小林俊)

～オッ盾レース回想～

Jr. 7番 吉田 武史

今シーズンが明けてから、何度も壁にぶつかり、みんなでも悩み苦しんできたJr.クルーであったが悩み苦しむ度に「対校のシート」という目標を確認しながら、個々人が努力を続けてきた。我々にとって、オッ盾とは、その結果を問う場所であり、一年間の集大成であった。

<予選>

昨日来の風もやみ、レースコンディションは万全であった。組み合わせは、東北大、慶応B、学習院、岡山大、大阪市立大である。「決して負ける相手ではない。」そう思いながらレースに臨んだ。が前半から東北大、岡山大に大きく出られ、中盤、学習院が勝負に出ると、Jr.らしからぬ気弱さであさりと道を空けてしまい、結局4位という不本意な結果となった。敗復にまわる。もう後がない。あせりと不安がよぎる。「力の限り漕ぐしかない。恥ずかしいレースだけはすまい。」9人がそう誓いあい、心ひとつに敗復へ臨んだ。

<敗復>

昨日同様コンディションは万全である。部員総出の同志社チアーに送られ出艇。嫌が上にも士気は高まる。他のメンバーの気合いをビシビシとはだに感じた。もう他のクルーは目に入らない。ただひたすら自分に集中し、スタートを待つ。スタート。スパートまで他艇にくらいつき、コンスタント勝負に持ちこんだ。しかし、ピッチが上がらない。他艇がピッチ38前後に対し、我々はピッチ34。練習で高ピッチが出せなかったツケがでてしまった。ジリジリと差は広げられてゆく。我々に残されたのは、ひたすら蹴ることだけである。オールメンが決してあきらめはしなかった。最後の1本まで全身全霊で蹴りこんだ。結果は4位。我々のオッ盾は終わった。

満足はしていない。完敗であった。自分達の力の100%が出ながら、おぼなかつたのである。日々の練習に勝ち続けること、それが勝利へとつながるのだと、痛感した。来季は最強の対校のシートを目指し、一から頑張りたい。

最後になりましたが、Jr.クルーを指導し、引っ張って下さった4回生：大竹さん、岡田さんに心から感謝します。本当にありがとうございました。

～インカレレース回想 Part 2～

フォア、そしてダブルスカルでインカレに出場した選手達は、この大会をどのように感じているのでしょうか。

フォア 2番 高橋 渉

フォアで全日本へ出してもらえる！これは大変ありがたいことであった。確かに瀬田杯では決勝へ進出したが、クルーの力量からしてとても全日で争えるような状態ではなかった。試合の1週間前でさえ、「このような状態では行ってもむだではないか」という意見がでたほどだった。しかし、僕はあきらめたくなかった。今シーズンの自分達の成果を表したかった。そうして試合当日をむかえた。予選は台風の影響で白波が立っていた。日大や中央と当たり正直言ってとても勝ち目はないと思った。しかし勝つことよりも自分達の力を出しきることを目標に試合に臨んだ。スタートはうまくいった。他のクルーにもひけはとらなかつた。が、思いもよらぬことに200mほどの地点で僕は腹をきってしまった。他のクルーにはグングンはなされていく。あせった。船がバタつく。実際、訳がわからないまま、ゴールしてしまっていた。とても悔しかった。結局自分達の力を出しきれなかつた。僕は、自分が腹をきったという個人的なことをばかりにとらわれて、船が進むという一番大事なことを忘れてしまっていた。1人で漕いでいるのではなく、みんなでも協力してはじめて船が進むのだということを忘れていた。試合直後は精神的にひどくまいったが、敗復ではそれをバネに反対に開きなおるところまでもっていった。正直いって敗復では勝てると思っていた。そのつもりで試合にのぞんだ。昨日のことは考えず、できるだけ力まないよう心がけた。結果は最下位で非常に悔しい思いはしたが、全力は出しきることができた。順位という結果は出なかつたが、クルーにとってはかりしれない成果があったと思う。このことが将来的には順位という結果につながっていくにちがいない。

ダブルスカル BOW 原田昌彦

関西選手権が終わり、8月23日から始まるインカレ・全日本のためのダブルスカルを4回生の小原さんと組んだ。20日たらずでベストの状態にもっていくのは決して容易ではなかつた。

まず私達は、能率のよい、ハードで楽しいモーションを合言葉に、自分達のたてた目標に向かって必死になった。体力面では決して関東のクルーにも引けをとらないので、あとは精神面と技術面の問題だった。何度も壁があったが2人の気持ちも高まり、日々の練習により日を重ねるごとに調子もよくなっていき、戸田への出発までには自分達の最高の状態に持っていった。あとは瀬田の感じを戸田で出さなければならなかった。しかし、戸田での調子は満足のいくものではなかつた。(気持ちだけは瀬田の感じを失ってはいなかつた。)いよいよ予選が始まり、いきなり優勝候補の日本大学との対戦となったが、スタートで横に並んでもひるむことはなかつた。スタートが切られたが、思うように出られなかつた。やっと艇の調子が出てきた時、意外にも日本大学とは並んでいった。いけると思ったが、1000m過ぎから差はぐんぐん開いていき、そのまま2位でゴール。関東の壁の厚さを改めて感じさせられた。予選での失敗を頭にたたき込んでいどんだ敗者復活戦では、相手にも恵まれ、レース展開としては楽なレースとなった為、ここで一気に感じを取り戻すつもりで漕ぎ1位となった。が、またもや反省の残るレースになった。もう失敗の許されない準決勝。敵は東海大学、日本体育大学、両校とも勿論優勝候補の筆頭である。結果は3位で決勝には出場できなかつた。

今回インカレに出場して感じたのは、関東の壁の厚さと練習の大切さである。練習で120%の力を出せてこそ、レースで100%の力が出せるのである。私達は、練習では100%の力が出せたがレースではそれを出せなかつた。今年の夏に学んだ事をいつまでも胸に、残りの2年間悔いの残らぬようがんばろうと思う。



フォア (左からcox下田、重松、高橋、山下、宇戸)

関西選手権レース回想

朝日レガッタでの雪辱をはらすべく、日夜練習に励んできましたが、その成果を発揮しようと今までにない程の闘争心をもって関西選手権に挑みました。前年度優勝というプレッシャーの中、選手達はどんな思いを抱きながらレースにのぞんだのでしょうか。

対校 2番 加藤 康

<予選>

予選1位通過は確実だと誰もがそう思っていた。ところが、立命館大にスタートから出られてしまった。コンスタントに入っても艇速はのびず、スタートで追いつきかけたが、勝負どころでミスが出る。そして、そのままゴールイン。

相手を甘くみていたのかもしれない。上位2艇が準決勝にコマを進めることができたので救われたが、とにかく集中力が欠けたレースだった。われわれは今後のレースに大きな課題を残した。

<準決勝>

予選タイム1位で通過した京都大とあたってしまった。決勝と同じようなものである。崖っぷちに立たされた。ここで負けたら、今シーズン立ち直れないような気がした。しかし、実力を出せば、必ず勝てるという自信もあった。予選での反省材料を生かし、レース中はもちろんのこと出艇からスタート地点に着くまでとにかく全員で声を出して集中力をとぎれさせることのないように努めようということになった。

レースは終始同志社ペースだった。われわれはスタートからとび出し、その後も京都大を寄せつかなかった。ゴール。1着だった。気合いで押しきったようなレースだった。やればできるという自信につながったレースであった。

<決勝>

準決勝のあと、2時間ほどしか休憩時間がなかった。われわれは集中力を高め、決勝で全力を出しきるために頭を切りかえ、できるだけ体を休めるよう努めた。疲労感もあったが、気合いを入れ直してレースにのぞんだ。

何としても東レに勝って優勝したかった。また、勝てるはずだった。

レースはスタートから東レに出られた。コンスタント1本1本に関しては同志社の方がのびていたが、足けりを入れるたびに皆のバランスがくずれる。追いつく。離される。また追いつく。離されてしまう。離される度にあせりが生じ、そのために勝負どころでのミスを誘う。そして逃げきられてしまった。

結果は2位であった。が、昨年は優勝している。“勝たなければいけない”という、言葉には出されない、だがはだを刺すように痛いほどはっきり感じとれるプレッシャー。対校にのるうえでは常に意識されるものではあるが、そういった雰囲気の中でのレースはまことに苦しいものであった。

優勝をのがしたのは残念だが、それ以上に得たものは大きかったように思う。自分たちの力をはっきりと認識させられた大会だった。

シングルスカル 小原隆史

シングルスカルに転向して5ヶ月、私にとって3度目のレースであった。覚えておられるでしょうか？朝レで落水して情けないレースをしたことを。結果を出さねば何を言っても始まらない。あの時の悔しさを何とかレースで晴らしたい！今度も勝てなかったら、もう自分には後がないんだ。そんなあせりと不安を感じながらこの大会に望みました。

<予選>私はスタート地点に向かう途中、艇を止めて、後輩の原田のレースを見ていました。彼とはレース前の数週間、共に練習を行い、良きライバルでした。その彼が予選を5分42秒の1位で通過したのを見て、ますます闘志が湧いてきました。スタートがきられ500m付近にきた頃、もう勝敗は見えていました。しかし総予選通過タイムトップを密かに狙っていた私は、好タイムを狙って残り1000mを力漕しました。結果、5分40秒で総予選通過タイムトップに立つことができました。

<準々決勝>予選ほど、2位との差は開きませんでした。それでも余裕をもってレース運びができました。

<準決勝>予選、準々決と通過タイムトップに立った私は、少し自信ができました。このレースもトップで上がり決勝レースにはずみをつけたい所でしたが、スタートで出遅れた私はずっと頭を押さえられ2位でした。800m付近、同志社の大声援が聞こえる中、「これではいけない、トップで通過してやる！」と思い、必死で追い上げ、コンマ差で1位通過することができました。

<決勝>「N T T・水野さんの関選8連覇は、俺がくい止めてやる！」、そう決意してスタート地点に付けました。「用意、ロー！」。高まる緊張の中、スタートがきられました。スタートダッシュも決まり、「よし、いける」と思ったのですが、その地点で水野は頭ひとつ飛び出ていた。その後を、同大・小原、N T T・菊谷が追う展開となった。非常に苦しいレース展開の中、私は必死に水野について行った。差は2艇身であった。1200m付近、私は最後の勝負に出た。足けりのあとそのままラストパートに入った……タイム5分29秒が出た。しかし結果は2位だった。ゴールした直後、こみ上げてくる涙を押さえることはできなかった。幾度となく悔し涙を流したことはあった。でもこの時の涙は、いつもの涙とはちょっと違ってたように思う。手にしたメダルは重くとてもとても大きく感じた。「私の宝物です。」

～瀬田川杯レース回想 Part 1～

Jr.エイト BOW 小林 俊樹

[予選]

レース当日は、晴天に恵まれたが、あいにく強い順風がふき、波も高く最悪のコンディションとなった。Jr.のクルーは、3回生を中心として、4回生1人、2回生2人と比較的若く、調子に乗れば勢いでそのままいくが、いったん落ちだすとどこまでも崩れてゆくという調子の波の差が大きいという問題点があったため、特にスタートがレースの大きなキーポイントとなった。組み合わせを見ると、敵になりそうなクルーはいない。しかし、スタートに失敗し関大Bに出られ、続くコンスタントでも思う様に艇速がのびず、足蹴りの連発でようやく400mで関大をさし、その後、徐々に差を広げ2位の関大には4秒半の差をつけて1位でゴールしたが、前半のレース展開のまずさ、波や風のために冷静さを失い本来の自分達の力を出せないという課題の多く残った全く満足のいかないレースであった。

[準決勝]

昨日の予選の反省のもとに、準決勝ではとにかく自分たちの漕ぎに集中し持っている力を出しきることだけを全員で心がけた。スタートはまずまずであったにもかかわらず、京大と滋賀大(経)に出られ、足蹴りで2位の滋賀大(経)に並ぼうとしたが、水をひっかける等のミスが目立ち、勝負どころでとらえられず、ラスト500mでも1位京大、2位の滋賀大(経)との差は、1艇身と縮まらなかった。だが、練習量の豊富さからスタミナはまだ十分にあり、ラストで2艇をさす自信と体力は持っていた。しかしここでもミスが出て、詰めた所で水をひっかけ、また離されという事の繰返し。結果は3着で準決勝敗退となってしまった。

決勝はおろか準決勝で負けてしまうなど論外ではあるが、レース初めての者もあり、改めてレースで実力を出す難しさ、その為の練習におけるオール1本1本に対する集中力や、取り組み方など考えさせられるものがあり、プラスになる点も多かったと思う。反省すべき点は反省してとにかく前向きに行ければこの悔しさが生きてくるのではないかな。

フォア BOW 宇戸 大輔

試合の2週間前にメンバーの1人が病気の為緊急入院するというアクシデントがおこり、試合への出場は無理かと思われた。しかし幸いにも試合当日の1週間前に退院することができたので、どうにか出場することができた。4人全員そろっての練習期間が短かく、調整も不十分なままでの出漕で、誰もが不安は隠せなかった。だが、現状でのクルーの最高の力が出せればよいと考えなおし、全力を出し切るために思いきってやろうと決心した。ところが、ふたをあけてみれば、予選では2位でゴールし、しかも予選通過タイム3位という好発進であった。この結果、クルーの中から練習不足の不安はたちまち消えさり、それにかわって、メダルの可能性というものがクルーを元気づけた。次の日の準決勝を通過した時は、体力不足のため、体は弱りきっていたのだが、ここまできたのだから思いきりよく捨て身の覚悟でやるしかない。決勝は5クルーで行われた。予選、準決勝と同じように、決勝でも最高のスタートをきることができた。それにもかかわらず、300メートル付近までは互角のレースをしていたのに、急に他のクルーが見えなくなった。いくら足蹴りを入れても追いつかない。必死で追いつけようとしたのだが、なかなか舟が進まず、結局届かなかった。結果は5位であった。

このレースの敗因は練習不足のため体力が充分でなかったことと、疲れた時に自分の漕ぎというものが維持できなかったことにあると思われる。反省すべき点はたくさんある。しかし、決勝に進出できたことは大変良い経験になったように思う。この経験を次のレースに向けての良い糧とし、全日本・インカレ優勝という最終目標に向けて精一杯頑張っていこうと思う。

<関選レース結果>

対校	準優勝
Jr.	準決勝進出
フォア	5位

中日本レガッタレース回想

対校 6番 1回生 堀内 昭宏

5月の朝日レガッタで苦い思いをただけに、全日・インカレを狙う意味で、この中日本レガッタは、通過点ではあるが、重要なレースであった。朝日レガッタで残された最大の課題、前半からリズムをつくり、いかにコンスタントに活かしていくか、これが克服されない限りタイムアップは図れない。対校メンバーは、日頃から、練習の中でそれを意識することで課題の克服を目指し、この中日本レガッタに望んだのである。狙うのはもちろん「優勝」しかなかった。

〔予選〕この日は、前日からの強風と雨の影響で、コンディションは最悪であった。予選の組で要注意だったのは、隣のレーン慶応大学。高波と強風は、漕手としてかなり気になったが、スタートに艇を着けると、そんな不安も失せてしまった。スタートからスルスルと慶応に出られ、その後を、1艇身差で負う形になった。前半からリズムに乗ろうとする我々であったが、波に弱いという欠点の為、要所である足蹴りで思うような勝負がかけられず、慶応との差は縮まらずにズルズルとゴール。2位で予選通過はしたものの、納得のいくレースができなかっただけに準決勝こそはという気持ちでいっぱいだった。

〔準決勝〕昨日とうって変わっての快晴、穏やかな水面が、レースへの勝ち気を増幅させた。相手は、立教大学と東北大学。もちろん、この準決勝には後がない。1位で決勝進出を狙っていた。スタートから、立教と東北が見えなくなった。200mで、2位の東北とはまだ水が空いていた。1000mでも差は縮まらずかなり苦しいものがあった。でも、私には「負け」は見えなかった。ラストスパートに入ると、ピッチはあがり、水面をとらえる8本のオールが、8人の体が、何かこう一艇の艇として一つになった感じがした。更に全身全霊をかけたスパートだったと言っても過言ではなかった。ゴールの瞬間、どうなっていたのか、私には解らなかつた。コンマ差で東北を、差していた。このスパートは、決勝への大きな自信となった。

〔決勝〕ここで、中日本レガッタ、本命中の本命、中央大学との決勝レースが待っていた。私達には、もう優勝しかなかった。絶対に勝つ、これだけであった。「ヨーイ、ロー」スタートから中央が前へ出る。とにかく、中央にしがみついて行こうと、コンスタントを思いきり漕いだ。そして700m、3位以下は、混戦状態であった。各艇が一斉にスパートに入る。わけの解らぬままゴール。結果は3位。私は、この時点で持っていた力をすべて使い果たしたと思ったが、同時にまだまだ、他の大学に及ばないものが我々には幾つかあることが明らかになった。今大会でも、最大の敗因は前半の伸びのなさが、出遅れにつながった事だった。これから、この問題を、どう克服するか、勝敗の別れ道が明らかになった以上、クルー全員で毎モーション意識を高めて練習することが勝利への第一歩だと実感した。

～瀬田川杯レース回想

Part 2～

ボート部に入部して早いもので3ヶ月ほどたちました。1回生たちは初めての大会をどんな気持ちでむかえたのでしょうか。

Aクルー整調 中澤郁男

7月28日は、とても暑い1日だった。初めての大会だったので大変緊張した。スタートが近づくにつれて心臓が高鳴ってきた。スタート!!まだボート歴が浅い僕達は見事に離されてしまった。ぜんぜん差が縮まらないまま1000m地点くらいまで来てしまった。追いつきたい、という気持ちのせいか、みんな「ダー」とか「差すぞ」とか叫んでいた。そのおかげか1300m地点くらいで1艇にだけ追いつくことができた。スパートの声響き、僕達は無我夢中で漕いだ。そして残り100mあたりでその艇を抜いた。このままいってくれ、そう思っていた。結果は最下位だった。結局ゴール前で差し返されてしまったのだ。手足はパンパンに張り、心臓が飛び出そうだった。でも何だかわからない満足感もあった。結果は悪いがボート生活で忘れられないレースになるだろうな、そう思った。

Bクルー整調 竹内秀暢

レースを振り返ってその時の状況を話してくれと言われても、僕はほとんど何も憶えていない。ただ闇雲に漕いで、時間の経過が異常に遅く感じられて、たまたま悔しくて……。初めてのレースだったとはいえ、あまりにも腑甲斐無い負け方だった。レース後、クルー達とも話したのだが、負けたいちばんの原因は、自分達は一回生で初心者だから、という気持ちの甘えだったのだと思う。気合い負けして艇も今一つ元気がなかった。また今回のレースで痛感したのは、試合に向けて全員が万全のコンディションでレースに臨むことはとても難しいということ。そしてその困難を克服するのがクルーの力であるということだ。今回の反省を次のレースで生かせるようにしたい。また、クラブをもっと楽しんでできるものにしていきたいと思う。

Cクルー 整調 三野順一郎

瀬田川杯では2本漕いだ。どちらのレースも勝負負けまでにはほど遠かった。しかし、レースの雰囲気はしっかりと味わえた。合宿所前からの蹴り出し、スタート地点までのウォーミングアップ、スタート前まではこれまで感じたことのない緊張感を感じた。レースそのものは死にそうになるくらい思い切り漕げたので悔いはなかったし、緊張から開放されそう快だった。瀬田川杯に参加したことによって、ボート競技とはどのようなものか分かり、次の試合ではさらに自分が満足できるようなレースができるように感じる。

——4回生からひと言——

主将 三上 和彦

団体行動のなかでの自分の役割をきちんと把握してください。目的は全員1つだと思いますが、それに致るアプローチはいろいろあるはず。お互いが一見無関係な役割を担っているようですが、それぞれが徹底的に自分の役割を果たせば必ず1つになると思います。来年は100周年ということで何かと囲りがうるさいと思いますが、自分のペースを守って着実にレベルを上げていってください。

主務 杉山 伸

すばらしい先輩、同僚、そして後輩達に恵まれ、4年間、ボート部での活動を続けられたことを大変うれしく思います。

試乗会で瀬田に来て、ボートに初めて乗った時のあの何とも言えない感触を味わって、スカル、対校、マネージャーとあつという間の4年間でした。

レースで勝つことは大変難しいと思いますが、やれば必ず成果が出るのがボートです。私も何らかの形で今後もボート部に協力していきたいと思っています。

現役諸君、悔いを残さないように精一杯頑張ってください。

副将 佐藤 将人

試合前のどうしようもない緊張感、勝負への恐怖感、試合中に自分の全てをかけてうち込む気迫、試合後の喜び、悲しみなど、ボートを通じて感じた事、考えた事、それらすべてをもう二度と体感する事はないのかと思うと、寂しくてたまらない今日この頃です。

私がここまでやってこられたのは、同志社大学ボート部を通じて、素晴らしい方達にお会いできたからです。監督、コーチ、OBの方々をはじめ先輩、後輩、同輩に感謝するとともに、これからも御指導のほど宜しくお願いします。

副将 小原 隆史

ボート生活を振り返って、今改めて考えてみると、この4年間は“悔しさ”の連続だったように思う。1回生の夏、腰痛のため練習から外れた時、同期のみんなが頑張っている中で、「俺は一体、何しにここに来たんやろ?」とみじめに思った。対校から外された時、(くやくて)? たまらなかつた。合宿所を出された時、「今に見てろよ」と自分を励ました。なかなか対校に乗りなくて、部をやめようと思ったこともあった。……己の未熟さを振り返り、自分を過大評価していたことを、恥ずかしく思う。「評価は自分がするものではなく、他人がするものである。」:このクラブで、そんなことを学びました。

監督・コーチには感謝しています。

ありがとうございました。

会計 乾 健治

私を4年間支えてくれた人々に感謝します。今シーズンも対校をはじめよくがんばってくれましたが、勝てま

せんでした。勝つことに絶対ということはありません。その答えが一つということもないでしょう。来シーズンはくやし涙などがさないで下さい。強い対校ができると思っています。横山監督をはじめみなさんお世話になりました。笑顔でわらえる思い出をありがとう。

“我事において後悔せず前進あるのみ”

学連 津嶋 泰

この4年間は漕手、COX、マネージャーとすべての立場を経験しました。クラブを強くするには、この3Dに加え、監督・コーチ陣との関係を加えたものがうまくかみ合っただけというものが当たり前のように言われていますが、実際はとても難しいということをも身をもって知らされました。今シーズンは満足いく結果は出ませんでした。戸田では関東のレベルを知ることができました。宮崎、岡本を中心とする来シーズンまわりのことは気にせず、自分たちのカラーを存分に出して部を盛り上げていって下さい。ボート部で過ごした4年間、いやでも体にしみついています。これを糧にこれからも頑張ろうと思っています。

楠原 雅也

私のボート生活4年間には悔いが残った。それは日本一になれなかつた事、そして周囲の人達に恩返しが出来なかつた事である。確かに日本一になるのはCREWだけであり、その1つになるのは困難な事だが、悔いの残らない方法はそれしかないと思う。全日本決勝に残るとか、メダルを取るとかではなく、優勝することのみを目標にして欲しい。

山下 進

この4年間を振り返ってみると、私が生まれてからこれまでの人生の中で一番思い出深い感じがします。思い返してみると、セクションで入部して一回と二回の時はダブルスカルでそれなりの戦績を残すことができ、三回、四回の時はエイトでの8人の連帯感と友情を知る事ができ誠に同志社大学ボート部には感謝しております。この4年間の戦績より何よりも、この同志社大学ボート部とおそ千二百日を過ごした合宿生活が自分にとってどれほどプラスになったことか。一回から三回のみなさんは自分が納得のいくボート生活が送れるようがんばってください。FUCK!!

重松 健一

大学4年間のボート生活は、今にして思えば、長いようで短かったように思います。現役時には、毎朝の起床コールがとても辛かったのですが、今では懐かしく思います。今シーズンは、主に後輩の指導をしてきましたが、まだまだやり残したことがあったように思います。又、自分にしても本当に力を出し切ることが出来たのか、後悔はしないと思いつつも、何か心に引っかかるものがあります。現役諸君、せっかく大学4年間という時を、ボートというスポーツに賭けているのだから、一生の誇

りとなる思い出を作るため努力して下さい。

岡田太一郎

大学生生活の全てを瀬田で過ごし、ほぼ同じ生活パターンの中に身を没した。しかし4回生の時にインカレ・全日で勝つ事が出来れば、この4年間の労もねぎらわれるというものだ。そうなった時には毎日の練習がもっと意味あるものとなり、生き生きとした僕らの体験の記憶となったろう。インカレの決勝に出漕する為には、勉強以外の自由時間の全てを、乗艇練習にあてる事が第一であり、部員をまとめる4回生は、メニュー問題よりも、各個人の勝つ事に対する意志の増幅を図り、統制する事が必要だろう。僕は、貴重な青春の時にボートに出会い、同じ時をすごした。時間をもっと大切に。レースは最期の練習である。

大竹 宏

今ボート部での4年間を振り返るとあっという間に過ぎてしまったようだ。今年は、対校、Jr共に昨年よりも良い結果を出せなかった。それが自分の4年間での唯一の心残りだ。あの時あのようにすれば、こうすれば良かった、と思う事がある。後輩諸君には、後悔することなく、「これでもか、これでもか」というぐらいの気持ちで頑張ってください。今後の同志社の健闘を祈っています。

中村 祥子

ボート部に入部したのが、つい先日のように思われる。4年間をふり返ってみれば、苦しいことが山のようにあったが、それらのすべてが必ず将来自分に、プラスとなって戻ってくると信じて頑張った。4年間というのは短いようで長くて、ともすれば怠惰な生活に流されがちであるが、ボート部に行きながらの学生生活は「時間の使い方」をマスターさせてくれたと思う。これから世間の荒波に向かって蹴り出していこうとしているが、どんな困難が目の前に立ちはだかっても、「やれば出来る」という自信をもって頑張りたいと思う。

井上 京子

体育会でマネージャーをするという事がどういう事か、全く知らずに入部した私でしたが、いつの間にか後輩がたくさんでき、また、無事引退することができ、とてもうれしく思っています。ボート部は本当に厳しく、又、すばらしいクラブでした。今年入部してくれた女子マネ、つらい事もあるかとは思いますが、このクラブの良さが解るまで、ぜひドーンと構えて頑張ってください。皆さん、色々お世話になり、本当にありがとうございました。

新幹部紹介

主将 宮崎 寿春
主務 岡本 竜人
副将 谷 昌二郎
会計 小林 重之
学連 下田 淳

編集委員

田村 麻理子
余谷 有紀枝

部報 力漕

1990年11月 発行

発行 同志社大学ボート部

〒520-21 大津市瀬田3-2-30

TEL 0775-45-0702

FAX 0775-43-1194